

# メタ認知能力と自己調整能力の育成を目指し、振り返りを重視した指導を全校で実施

大阪府教育センター附属高校は、2017年度、「クローバープラン」で既存の教育活動を整理し、育成を目指す資質・能力を教員間で共有した。その中でもメタ認知能力と自己調整能力の育成に焦点をあて、ポートフォリオの活用や授業での振り返りを強化してきた。教科・科目を超えた授業研究などを進める過程で、学校教育活動全体のPDCAサイクルが回り始めている。

## Plan

### 「クローバープラン」で育成を目指す資質・能力を共有

大阪府の教育を牽引するナビゲーションスクールとして2011年度に開校した大阪府教育センター附属高校は、大阪府教育センターの研究・研修機能と一体となった教育活動を展開する公立高校だ。開校以来、「変化の激しい社会の中で感性を豊かに、生き抜く子どもたちを育てる学校」を目指す学校像に掲げている。16年度には、文部科学省「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」（3年間）

の指定を受け、カリキュラム・マネジメントの実践、PDCAサイクルに基づいた学校改革に着手。各教科・科目で、パフォーマンス課題の実践やアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善などに取り組んだ。

17年度は、学校教育活動全体のPDCAサイクルの確立に動き出した。まず、教科・科目を超えて教育目標の共有を図るため、「クローバープラン」を作成した。それは、既存の教育活動を「確かな学力の育成」「探究力の育成」「キャリア教育の実践」「自己実現を叶える為のサポート」の4つに整理し、目指す学校像と照らし合わせて、それぞれの教育

活動で育成する資質・能力を示したものだ(図1)。その中で、特に育成を目指す資質・能力として掲げたのが、「メタ認知能力」と「自己調整能力」である。首席の田中昌一まさかず先生は次のように語る。

「生徒自身が目標を持ち、その実現に向かって努力する姿勢や力を育まない限り、基礎学力の定着や思考力等の育成は難しいでしょう。生徒が自分の学力を客観的に見て課題を把握し、自ら改善していく力を育むことが最大の目標だと捉えました」  
その上で、カリキュラム・マネジメントについて理解を深めるためのワークショップを実施。学年団で

は「学年目標」と「育てたい力」を、各教科では「科目の目標、つけたい力」を設定し、全学年、全教科・科目を見通した「年間指導計画一覧表」を作成した。宮田早永子さよこ教頭は、その意義を次のように説明する。

「年間指導計画一覧表」により、時期ごとの各教科・科目の内容及び育成を目指す資質・能力が一覧で見られるようになりました。教科内での指導計画を立てる際も、他教科との連携を考えたり、重複している部分は精選したりと、他教科との連動を意識した計画の立案が可能になり、カリキュラム・マネジメントの第一歩となりました」



**竹島貴之** たけしま たかゆき  
大阪府教育センター附属高校  
教職歴4年。同校に赴任して5年目。3学年副担任。進路指導部。



**太田圭輔** おおた たけいすけ  
大阪府教育センター附属高校  
教職歴8年。同校に赴任して2年目。1学年担任。進路指導部。



**酒井将平** さかい しゅうへい  
大阪府教育センター附属高校  
教職歴9年。同校に赴任して3年目。探究科主任。総務企画部。



**池田 径** いけだ けい  
大阪府教育センター附属高校  
教職歴12年。同校に赴任して2年目。指導教諭。生徒指導部。



**田中昌一** たなかまさかず  
大阪府教育センター附属高校  
教職歴34年。同校に赴任して8年目。首席。



**宮田早永子** みやた さえこ  
大阪府教育センター附属高校教頭  
教職歴26年。同校に赴任して10年目。

メタ認知能力と自己調整能力の育成に向けて始めたのが、1年生を対象としたポートフォリオの活用だ。

## ポートフォリオを活用した振り返りにより見通しを持たせる

0

新入生オリエンテーションで、将来の目標を見据えて今、何をすべきかを考える自己調整が重要になることを伝え、「クローバープラン」の内容とポートフォリオの意義を説明。学習や行事の活動記録、模擬試験の帳票などをクリアファイルに蓄積させるようにした。

その一例は、「クローバープラン『夏休み実行計画』」だ。夏季休業前に4つのプランそれぞれの計画を立てさせ、夏季休業後にその計画の振り返りをさせた。また、年度末には、4つのプランごとに1年間を振り返り、できたこととできなかったこと、それぞれのプロセスとその結果、そして次年度に向けた目標とその達成

### 大阪府教育センター附属高校

- ◎大阪府立大和川高校を改編して開校。「共に学び、共に敬い、共に高まる」をスローガンに掲げ、新たな学びの創造を目指す。アクティブ・ラーニングや探究学習などを通して、PISA型学力の育成を図る。
- ◎設立 2011(平成23)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2018年度入試合格実績(現浪計)  
京都外国語大、立命館大、龍谷大、追手門学院大、大阪経済大、大阪電気通信大、関西外国語大、関西大、近畿大、摂南大、桃山学院大、関西学院大、甲南大、神戸学院大などに延べ144人が合格。
- ◎URL <http://www.osaka-c.ed.jp/partner/>

に向けた方策を考えさせた(P.14 図2)。田中先生はこう語る。

「生徒は、活動を振り返り、その内容をメタ認知することができれば、自分で見通しを立て、前に進めるで

図1 「クローバープラン」

### 確かな学力の育成

- 全教科で取り組む授業研究・授業改善(ICEモデルの実践) パフォーマンス課題、ルーブリックの活用、思考力・判断力を育みつつ、基礎学力の定着を図る。(ICT活用、アクティブ・ラーニング)
- 学びの基礎診断等を活用したPDCAサイクルの確立 生徒 計画を立てながら学習する。テストの結果を振り返り修正する。  
教員 観点別学習状況評価に基づくシラバスによる授業の実施。
- カリキュラム・マネジメントの実践(コア) 教育課程実施計画、シラバスの検証を行い改善する。(カリキュラム面の関連性、マネジメント面の協働性)

### 探究力の育成

- コミュニケーション能力の育成(チームで働く) 職業調べ、商品開発、演劇プログラム等を通して聴く、話す、協働する等の力をつける。
- 社会とつながる力の育成(考え抜く) 文化研究やフィールドワークを通して、かかわる、計画する、多面的・多角的に考える等の力をつける。
- 未来を拓く力の育成(前に踏み出す) 個人、グループによる課題研究を通して、企画する、望ましい解決をめざす、発信する、進路を切り拓く等の力をつける。  
「探究ナビ」を教科横断型の教科として、研究・実践を行う

### キャリア教育の実践

仕事・社会へのトランジション

- 3年間を通した進路指導計画の実践 進路HR、進路行事、探究ナビとの連携、高大連携、外部人材の活用等。
- ガイダンス機能を充実させ、自ら学ぶ生徒を育成 教務部と進路指導部、学年が連携した選択指導、社会とのつながりを意識させる授業の実践。(外部機関との連携、パフォーマンス課題)  
メタ認知能力を伸ばし、自己調整型の主体的な学習ができる工夫の実践。
- 進路希望実現に結びつく学力の育成 目標を持って主体的に学習する力を育成する進路指導。

### 自己実現を叶える為のサポート

- 行事・部活動、生徒会、ボランティア等の特別活動を通しての人間力の育成 自主的な活動計画、リーダーシップ、チームワーク等。
- 人権教育を基盤とした生徒指導 他者への思いやり、基本的な生活習慣の確立。
- 読書活動の充実 図書室の充実により、読解力育成の基礎固め、知識を広げ、教養を深める。

ほかに、生徒向けに4つの学習で何を行うかをまとめた「クローバープラン」も作成し、生徒に配布した。

\*学校資料を基に編集部で作成

しよう。ポートフォリオは主体性の育成にもつながると考えました」  
ポートフォリオの導入は、教員が振り返りの大切さを再認識する契機にもなったと、指導教諭の池田径先生

図2 「夏休み実行計画」と「1学年末の振り返り」のワークシート

夏休み実行計画 \*学校資料をそのまま掲載

(※)夏休みに入るにあたり、「A」「B」「C」「D」の各学びに  
必ず生徒記入して下さい。  
夏休みの終わりに、振り返って、実際に出来た事を記載し記入して下さい。あるいは達成は計画してい  
なかったが、得意になった事で取り組んだ事、その達成を「A」～「D」のいずれかに分類できる場合は、  
それぞれで右欄に記入して下さい。

	夏休み前の計画	夏休みの振り返り
(A)授業の学び、学力向上の取 組み		
(B)探究的な学び		
(C)道徳学習、授業の目標に向 けた取組み		
(D)部活動、行事等に おける学 び		

A(授業の学び・学力向上の取組み) 1学年末の振り返り

授業による成果、授業おける成果(レポート・プロジェクト、作文コンクール等)  
実力テストや(学びの基礎診断)における成績、英検、数検、漢検等の成果  
(※)出来た事、出来なかった事、どういふプロセスでそれが出来たのか、なぜ出来なかったのか、  
次年度はどうしたいか、どうすれば、それが可能になるのか、考えて書いてみよう。

1年 組 番 名前

(※) B、C、Dの学びについて、2週間の振り返り書きをさせ、提出

(※) その他  
・学習目標の達成したワークシートをタリアーノフォルダに保存  
・ベネッセ実力検査受検時に、各自の学習をタリアーノフォルダに保存  
・年間を通して、各自が4つの学びの成果をタリアーノフォルダに保存

(※) 8月28日(月)始業式の日には、この用紙を担任の先生へ提出  
帰国時(成果物「またはコピー等」)は、タリアーノフォルダに保存  
1年 ( ) 組 ( ) 番 名前

生は指摘する。  
「本校には、ナビゲーションスクー  
ルとして、まずはやってみるとい  
意識が教員間に根づいていますが、  
教育活動の綿密な効果検証は手薄に  
なりがちでした。ポートフォリオの  
作成は、振り返りの重要性を認識す  
る大きなきっかけにもなりました」  
田中先生は、担当する「数学I」  
の授業で最初に、単元の指導計画が

掲載され、「要点・発見・課題」の  
観点で振り返りを書き込めるワー  
クシート(図3)を配布し、生徒が見  
通しを持って授業に臨めるよう  
するとともに、毎時間振り返りを行  
わせるようにした。そして、単元の最  
後には、日常の問題を授業で学んだ  
数学的な知識・技能を用いて解決す  
るパフォーマンス課題を出し、その  
結果をルーブリックで評価した。

図3 「学びの地図」(単元計画表)「数学I」2次不等式

①学びの地図(2次不等式の解法) (※)このプリントは、2次不等式が終わるまで、毎時間持つてくる事。最後に提出してもらいます。

修正版 1年 組 番 氏名

学習項目	目標(評価規準)	自己評価 A B C D	各時間の学習振り返り(記述して下さい)				学習の振り返り						
			今日の学習内容 (ポイント)は、何で したか?	毎日、1番難しい事 は、何でしたか?	毎日、得意になった のは何だったか?	毎日、困ったのは何 だったか?	振り返り 項目	振り返り 項目	振り返り 項目	振り返り 項目			
2次不等式の解法 (1)	・2次不等式を解くことができる。 ・数値のみを利用して、2次不等式を解くことができる。												
2次不等式の解法 (2)	・2次不等式が与えられたときに2次不等式を解くことができる。 ・D<0になる2次不等式を解くことができる。												
2次不等式の解法 (3)	・D>0、D=0、D<0のそれぞれの場合を整理する。 ・2次不等式が与えられたときに、2次不等式を解くことができる。												
連立不等式	・連立不等式を解くことができる。 ・1行で書かれた不等式から連立不等式を導き、それを解くことができる。												

\*学校資料をそのまま掲載

「学期の最初にはメタ認知能力の  
重要性を説明し、定期考査の振り返  
りの際にも『メタ認知能力を發揮で  
きたかどうか』を3段階で振り返ら  
せました。ワークシートの記述を見  
ると、生徒は、目標を持ってパフォー  
マンス課題まで取り組んでいまし  
たが、メタ認知的な問いかけをして考  
えるまでには至っていませんでした」  
(田中先生)

Check

教科を超えた授業研究で  
指導の強み・弱みを述べ合う

評価指標の1つには、ベネッセの  
「進路マップ」(\*1)を活用した。  
GTZ(\*2)で学習到達度を測る  
とともに、「進路マップ」のアンケ  
ト項目にメタ認知能力や自己調整能  
力に関する学校独自の質問を加え  
た。その結果を見ると、メタ認知能  
力や自己調整能力の指導は、まだ全  
体には効果が表れていないと捉えて  
いる(図4)。さらに、1学期末と  
2学期末に実施した授業アンケート  
の結果では、「生徒の取り組み」「生  
徒の意識」「社会への関心や貢献」「他  
者と協働的に学ぶこと」に関する項  
目で前向きな変化が表れていた。た  
だ、そこでもメタ認知能力と自己調  
整能力には課題が見られた。  
16年度から進めるパフォーマンス  
課題の実践とアクティブ・ラーニ  
ングの視点からの授業改善に向けて  
は、6月と11月に「授業研究月間」  
を設けた。まず、6月は全教科で互  
見授業を実施。各教科でテーマを設  
けて授業を行い、参観者は、「授業  
観察シート」に、目標に対する指導

\*1 ベネッセが提供する、生徒の「なりたい自分さがし」と「なりたい自分づくり」をサポートする教材(適性検査、学力テストなどがある)。  
\*2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。

法の適切さ、生徒の学びの成立、参観者自身の学びについて記入し、それらの内容を教科内で総括した。

11月には、全教科の互見授業に加え、各教科で研究授業を実施。さらに、数学・理科・英語が授業を公開して全体研究授業を開催。全教員がいずれかの授業を参観、または授業の録画を視聴し、11月末の全体研修会では、参観した教科ごとのグループになり、指導案やパフォーマンス課題、評価方法などについて話し合った。そこでは、「導入や目標が明確だった」「抽象的な数学が具体的に

確だった」「導入や目標が明確だった」「抽象的な数学が具体的に

に理解できた」「メタ認知能力の育成の観点が弱い印象を受けた」など、活発に意見が交わされた。3学年副担任の竹島貴之先生はこう語る。

「教科を超えた研修会では、専門外の視点からの指摘が有効でした。教科担当が見逃ししやすい改善点を把握できました」

### Action

## 共通理解が進んだ今、全校でのPDCAサイクル構築を目指す

それらの検証を踏まえ、生徒が自分で学びのPDCAサイクルを着実に回せるよう、18年度はベネッセの「スターレポート」を導入した。1学年担任の太田圭輔先生は次のように説明する。

「生徒は、模擬試験の結果に一喜一憂するだけで、学習の振り返りを十分にできていませんでした。『スターレポート』の帳票には結果が詳細に示されているので、自己調整能力の育成に効果があると考えました。実際、面談の様子などから、自分で弱点を把握し、克服しようとする生徒が増えていると感じます」

ポートフォリオは、2年生では引

き続き活用し、1年生でも活用を始めた。[JAPAN e-Portfolio] (\*3)の活用も視野に入れ、より効果的な活用法を探っている。

教科指導においては、ルーブリックの質の改善を図ろうと、「ICEモデル」(\*4)の活用を始めた。既に学校設定科目の「探究ナビ」では、生徒に自身の活動を振り返らせ、どの段階の学びが達成できているのか「ICERulerブリック」で測っていた。

「探究ナビ」は1〜3年次で系統的に教科横断型の探究学習を行う科目で、学年団の多くの教員がかかわる。同科目で「ICEモデル」を活用したことにより、その有効性が浸透し、教科指導での導入となった。探究科主任の酒井将平先生はこう語る。

「『ICEモデル』でこれまでの授業を整理すると、どのような取り組みで、どういった資質・能力を育もうとしているのかが見えてきました。学びの質に着目した授業設計は、汎用性が高く、全教科の共通言語になるのではないかと考え、教科指導でも活用することになりました」

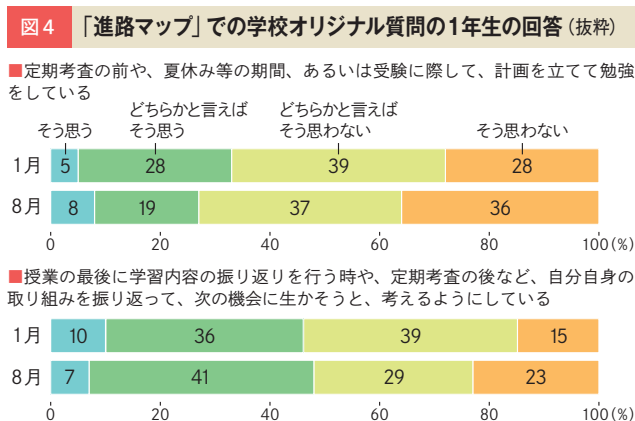
そこで、18年度初めに全教員が参加する校内研修を実施し、改めて「ICEモデル」の共通理解を図り、各

教科の状況に合わせて導入することとした。例えば、英語科では、定期考査後に「ICERulerブリック」を取り入れた振り返りを行い、生徒が自身の理解度をメタ認知できるようにした。また、「数学I」では、「ICEモデル」を取り入れた授業を行い、前年度の取り組みに加え、単元の最後に自分で連立不等式の文章問題をつくるパフォーマンス課題を行った。

「今年度は『文章を読んで連立不等式をつくることできた』という生徒が、前年度の14%から45%に増加しました。生徒は深く考えることを経験し、1次不等式の単元の理解が進んだのだと思います」(田中先生)

今後は、個々の教育活動で回されているPDCAサイクルを連動させ、学校教育目標の達成のための大きなPDCAサイクルを構築することが課題だ。

『クローバープラン』『探究ナビ』『ICEモデル』などを通して教員間の共通理解が進んだ今こそ、さらに大きなPDCAサイクルを確立する好機だと捉えています。教科を超えて議論を加速させ、生徒の資質・能力の育成に焦点をあてた指導を追求したいと思います」(酒井先生)



\* 学校資料を基に編集部で作成

\*3 文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業(主体性等分野)で構築・運営する、高校eポートフォリオ、大学出願ポータルサイト。  
 \*4 カナダで開発された学習と評価のモデルのこと。Ideas(習得)、Connections(活用)、Extensions(探究)の3つの段階で学びの質の変容を捉える。